

アイヌ口承文芸テキスト集10
白沢ナベ口述 ペナンペ金の子犬を授かる

採録・訳・註 中川裕

今回紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、千歳市蘭越の故白沢ナベ氏による、いわゆるパナンペ・ペナンペ譚（以下、パナンペ譚）と呼ばれるもののひとつである。パナンペ、ペナンペはそれぞれ *pana* 「川下」 *un* 「に住む」 *pe* 「もの」、*pena* 「川上」 *un* 「に住む」 *pe* 「もの」と語源分解できる。実際に白沢氏は *Panaunpe*、*Penaunpe* と発音することもあり、北海道大学の佐藤知己氏はその形を採用している。ただ、*u* の発音は微妙であり、同じような音的条件にある *Poyyaunpe* と比べた場合、*u* がはっきり聞こえるものはほぼ *Poyyaunpe* の *u* と同じ長さになるが、全体的にはもっと短いか、ほとんど聞こえないことのほうが多い。ということから、ここではパナンペ *Pananpe*、ペナンペ *Penanpe* の形で統一しておくことにする。

本稿は同一の話をもとに 1991 年 2 月 18 日（バージョン 1 : 整理番号 N9102181UP）と 1992 年 11 月 27 日（バージョン 2 : N9211271UP）の 2 回、白沢氏の御自宅でうかがっている。父親から聞いた話だということである。また、バージョン 1 の記録以前に佐藤知己氏が同一の話をもとに録音していることを、白沢氏から確認している。この話は『民譚集』第 12 話「パナンペ銀の小犬を授かる」の類話であり、長さも内容もアイヌ語教材として最適であったので、バージョン 2 を 93 年度の千葉大学文学部「アイヌ語初級」のテキストとして使っており、その後も 96 年度、98 年度、2001 年度に授業で利用している。

あらすじ

私はペナンペである。ある日山に行きたくてしかたがなくなり、山の奥のほうに進んでいくと、峰がそびえたって見えるところまでやってきた。見ると、そんなところに家があるとは思わなかったのに、大きな立派な家がたっている。と、その家の中から、銀の小犬、金の小犬がたくさん飛び出して来て、家のまわりでじゃれあって遊んでいる。その姿を笑いながら見ていると、家の中から一目で女神とわかるような女性が出てきて、私を見ると、「どこから来た人かわかりませんが、もう暗くなるから、家に入って泊って行きなさい」という。女神について家の中に入ると、そこにもたくさんの銀の小犬、金の小犬がいて、外から戻ってきたものたちと一緒にあって、とつきみあい、じゃれあっている。女神は私にとってもおいしいご馳走を作ってくれて食べさせてくれ、その晩私はそこに泊まった。

翌朝になると女神はまた食事の用意をしてくれ、その後で私にどちらの犬が欲しいかと尋ね、欲しい犬を連れて帰れば、お前は裕福になることができるという。私が金の小犬を選ぶと、女神はたくさんの団子をゆでて私に背負わせ、小犬が疲れた様子になったらその団子を一つ半与え、自分は半分食

べて連れていくようにという。小犬を連れて山を下りていくと、途中で木が倒れているところにやってくる。小犬はその倒木を越えることができずに、鳴きながら倒木の根っこの方に行ったり、梢の方に行ったりしている。疲れたのだらうと思い、私は女神の言いつけどおり、小犬に一つ半の団子を作り、自分では半分食べると、小犬は元気になって簡単に倒木を飛び越える。そうやって家まで連れ帰ってきた。家でも魚や肉のよいところを選んで、おいしいご馳走を作って小犬に食べさせた。

翌日になると、小犬は炉のまわりを「コンカネ カカカ ウォ、オ、オ」と鳴きながら走りまわった。すると、その口から金がぼとぼとこぼれ落ちる。私はそれを拾い集めたが、次から次から落ちてくるので、拾うのに忙しいほどである。そうやって、私は裕福になって暮らしていた。そこへ、川下のパナンペがやってきた。どうやってそんなに裕福になったのかと尋ねるので、「教えてやるから一緒に食事をしよう」と言うと、パナンペは、「俺が先に聞いたのに」と言って、戸口に小便をひっかけて行ってしまった。

聞くところによると、パナンペも奥山に行き、女神の住む家に泊めてもらった。そして銀の小犬をもらって山を下りてきたが、途中小犬が疲れて倒木を越えられなくなっても、小犬には団子を半分しか食べさせず、自分は一つ半食べて、小犬が倒木を乗り越えられないと、ひどく叩いて泣きわめかせながら下りてきた。そして家に戻っても粗末な食事しか与えなかった。すると翌日から、小犬は炉のまわりをうんちをぼとぼと落としながら走り回りつた。パナンペが怒って叩くと、小犬は泣きわめきながらますますうんちを落とす。パナンペはそれを掃き出そうとしたが、犬が次から次へうんちを落とすので、その中に頭をつっこみ、とうとううんちに埋もれて死んでしまった。

自分は女神の言う通りにして裕福になったのだから、カムイの言うことを決して粗末にするものではないと、パナンペが語った。

解説

金田一、久保寺、知里といった先人たちの記述では、パナンペ譚は常に3人称で語られるものとされてきたが、本話は2バージョンとも、大筋において通常の散文説話と同じく4人称で語られている。このようにパナンペ譚が4人称で語られるのは白沢氏に限ったことではなく、私が採録した他の話者にも見られることである。ただし、やはり本来は3人称で語られていたものだろうと考えられる。

一般にアイヌの物語文学は、特定の登場人物の視点からすべてが語られる。それは多くの場合4人称で示され、一部の地域の神謡に限り一人称複数でそれを示す。語りの視点が置かれている登場人物を「叙述者」と呼ぶことにするが、その叙述者のいない場面で話が進行する展開になった場合、叙述者を変更するなど何らかの工夫をする必要が出てくる。『神謡集』では、oyak ta terke「よそへ跳ぶ」などという表現で、この叙述者の交替が示されている。

一方、パナンペ譚は二人の登場人物が別々に行為を行うという構造の話であるが、3人称で語られ

ているかぎり叙述者は存在しないことになり、視点の問題は起こらない。この構造上の特徴と3人称語りであることとは、無関係ではないと思われる。しかし、一般の物語とおなじく4人称語りになってしまうと、その問題が顔を出すことになる。バージョン1の前半ではペナンペが叙述者として話が進むが、ペナンペの行動に話に移るとしばらく3人称で語られ、ペナンペが犬を連れて山を下りてくるところで、*tura wa san yak a=ye hi a=nu kor an=an*「連れて下りて来たということを私（ペナンペ）は聞いていた」と、ペナンペを叙述者として、そこまでの展開が彼の伝聞情報であることを示す文を入れている。バージョン2ではこの点がさらに技巧的になり、*seta or peka cikap or peka ne korka*「犬を通じて、鳥を通じてであるが」という常套句を用いて、ペナンペが噂として聞いた話であるということにし、ペナンペを叙述者とする形式を保っている。

白沢氏は、N8808312UP という別の散文説話で、和人の殿様に養子として連れて行かれた息子の試練を、遠く離れたところに住む実の父親を叙述者として描いており、そこでも人からの聞き伝えて知ったという形式をとっている。物語中の特定の人物の視点から物語を進めるという形式上の力がいかに強いかが示す事例であるが、こうした実質上の主人公（物語を進めるおもな行為者）と、形式上の主人公（叙述者）とのずれは、やはり不自然な展開を強いるものであって、めったに見られないやりかたである。そういった点からも、本稿のペナンペ譚が4人称で語られるのは本来の形式ではないことがうかがえる。

もうひとつこの話が『民譚集』などで知られているペナンペ譚と異なるのは、ペナンペ「川下の者」ではなくペナンペ「川上の者」のほうに先にいい思いをし、ペナンペがそれを真似てひどい目にあうという展開になっていることである。これが他の人の語りと違うということは、白沢氏自身も意識していることであり、バージョン1の語りを始める前に、白沢氏は次のように前置きしている。

Penanpe Pananpe an ruwe ne wa oka=an pe ne hike Penanpe a=ne wa 【ペナンペとペナンペがいて、私たちは暮らしていたが、私はペナンペであり】

ちょっとこれ間違っているようであったけども、佐藤（知己）さんにそうやってしまったんだから、そのなりいうわ。あの、下の方の人が、*pon seta* 【小犬】にあたりまえに食わせてもうかったっていうのねって、ゆった人いた。

（中川）あ、ペナンペのほうにもうかるの？

（白沢）うん。ペナンペのほうにもうかったって、わしもしばらくゆわんもんだから、ペナンペであったべか、ペナンペであったべか、それがわからなかったけども、どっちにしても、まあまあ似たことだべやと思って、わしゆったけ、ペナンペもうかったのについていうから、なんでもいかわ（笑）。

（中川）どっちでもいいわ。

（白沢）どっちでもいいよね。もうかったほうがもうかったんだもの。

このように、白沢氏は自分が間違っているかもしれないと前置きをしながら、久しぶりに語るのでどっちだかわからなくなったから「どっちでもいいよね」ということで、ペナンペが「もうかったほう」にして話を始めているが、私はあえて主人公を入れ替えて語ったのではないかと考えている。私の採録例では、沙流郡平取町のペナコリという集落に住む川上まつ子氏も、同じようにパナンペとペナンペの立場を入れ替えた語りを行っている。川上氏はその姓の由来となっているペナコリという集落名が、そもそも *pena* 「川上」という語を含んでおり、また平取町の中でも自分たちが上流と呼ばれる地域であるという意識も持っている（すぐ川下の二風谷などとは方言的にも若干違う点がある）。白沢氏もまた、同じ千歳市でもより市街に近いところに住んでいる人たち—たとえば *Rankousi*（現在の桂木）の人たちに比べて、自分がペナと呼ばれるべき地域の住民であることは強く意識していたと思われる。したがって両氏とも、ペナンペがやられ役というのはどうも面白くない展開だということ意識があったとしても不思議ではない。それがこのような役割の逆転をもたらしているのではないかと考える。

最後に、この話が『民譚集』「パナンペ銀の小犬を授かる」に対して、パナンペとペナンペの役割ばかりでなく、銀の小犬と金の小犬の役割も逆転している点について言及しておきたい。なお、*sirokane*（沙流・千歳地方以外では *sirokani*）と *konkane* (*konkani*) を、ここでは便宜上それぞれ「銀」と「金」と訳しておいたが、実際には何を指していたのかという問題があることは言うまでもない。ただ、ここではどちらのほうがイメージ的に、上位に見られていたかということに的を絞りたい。

日本でも欧米でも、金と銀とでは一般に金のほうが銀より上に格づけられている。それは「金銀財宝」などの熟語での語順や、「雄弁は銀、沈黙は金」などといったことわざによってもうかがえる。一方、アイヌ語においては、『神謡集』の有名な *sirokani pe ran ran piskan*, *konkani pe ran ran piskan* 「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」というフレーズに代表されるように、この両者を並列する表現では、*sirokane* が *konkane* に先行するのが普通である。それと並行するように、物語の中では *sirokane* のほうが *konkane* より格上とみなせる描写が出てくる場合がある。たとえば川上まつ子氏の M7908041UP という散文説話では、主人公の青年が *sokoni* 「ニワトコ」の女神から神具としての *tuki* 「杯」を授かる時、*sirokane tuki* は *pase kaska* 「重すぎる。格が高すぎる」ので、*konkane tuki* を持って行けと言われる場面がある。また、どちらかが霊力のあるもの、価値あるものとして単独で出てくる場合は、*sirokane* であることが普通である。『神謡集』第 11 話「この砂赤い赤い」で、毒の水を流す *pon nitne kamuy* のクルミの矢に対抗して、川の水を清めるために *pon Okikirmuy* が射放つのは、*sirokani* の *pon ay* 「小矢」である。『民譚集』「パナンペ銀の小犬を授かる」でも、パナンペが *sirokani posta* 「小犬」を授かって裕福になり、ペナンペが *konkani posta*

を連れ帰ってひどい目にあうという展開は、この一般的な序列と合致するように思える。

しかるに、本稿では2編とも、ペナンペがもらって裕福になるのは *konkane pon seta* のほうだということになっているのはなぜか？ 実は、白沢氏から筆者が聞き取りをした範囲では、物語にせよその他の話にせよ、*sirokane*、*konkane* という語が出てくるのはペナンペ譚のこの話以外にはない。したがってそれ以上のことはわからないと言すべきなのだが、あえて言えば、この話にしか出てこないということは、白沢氏において *konkane*、*sirokane* という単語は普段からよく使う言葉ではなく、この特定の話と結びつけて覚えられている言葉である可能性がある。そうだとすると、日本語の金、銀のイメージが投影されて *konkane* のほうが格上の扱いになっているのかもしれない。しかし、*konkane kar kar wo o o* のような、この話に固有と思われ、韻律的にも地の文とは別である特徴的なフレーズが使われている点がひっかかる。これがもともと *sirokane kar kar* という形だったとすると、それが *sirokane* から *konkane* への変化を食い止める役割を果たすことも考えられるのであり、したがって白沢氏が父親から聞いた時点ですでに *konkane* であった可能性も高くなる。というようなわけで、この問題はさらに他の資料との比較を要する。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_ (アンダーライン) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、*an w_a* → *an ma*。 *an h_i* のような例では、*h* が脱落して、*ani* のように発音されることを示す。... とあるのは、単なるポーズや言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それを示しておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合にのみ示してある。<wa>のように<>でくくって示したものは、次の語句を考えるときなどに直前の語の最終音節等を繰り返していることを示す。

参考文献略号

『神謡集』：知里幸恵（1923）『アイヌ神謡集』郷土研究社：（1978）岩波文庫

『民譚集』：知里真志保（1937）『アイヌ民譚集』郷土研究社：（1981）岩波文庫

『動物篇』：知里真志保（1953）『分類アイヌ語辞典 植物篇・動物篇』：『知里真志保著作集』別巻1
平凡社

『方言辞典』：服部四郎編（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店

『萱野辞典』：萱野茂編（1996）『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂

Penanpe an w_a oka=an.	ペナンペがいて、私たちは暮らしていた。
Pananpe an w_a oka=an	パナンペがいて、私たちは暮らしていた。
ruwe ene an h_i ne awa <wa>	のだが
Penanpe a=ne wa,	私はペナンペで
sineanto ekimne arpa=an rusuy wa	ある日のこと山に行きたくなくて
a=eyaynita h_ikeka	我慢していたが
arpa=an rusuy kimatekka ¹ p ne wa kusu	行きたくてどうしようもなくなったので
pet turasi arpa=an. ekimne ...	川に沿って上って行った。
ekimne patek arpa=an rusuy pe ne kusu,	山のほうにばかり行きたかったので
nenno ekimne patek arpa=an	そのまま山に向かって行きつづけ
ruwe ene an h_i ne akusu, tane sir...	たところ、もはや暗 ...
cup tane ram kane siran hine <ne>	日が落ちかかったところに
sirepa=an usi ene an h_i	やってきたところは
poro nupuri ² cekantokotorsuye kane an	大きな山、その峰が天に届くような
poro nupuri an ruwe ene an h_i ne wa	大きな山がそびえていて
oro ta iokunure=an.	そこでおおいに驚いた。
tane nupuri an ruwe ne yakun	もはや峰がある（見える）のであるなら
akkari neyun arpa=an wa	そこを越えてどこかへ行っても
rewsi usi ka a=erampewtek	泊まる場所もわからない。
sekor yaynu=an kor arpa=an ayne	と思いながら行くうちに
nupuri ousi ³ hanke ruwe ene an h_i ne hine	峰のふもとに近づいて
inkar=an akusu	みると
mosir pak cise poro cise	山のように大きな家が
as ru konna mewnatara.	堂々と建っていた。

¹ kimatekka : kimatekka は「～をせかす」とか「～を驚かす」という意味の他動詞だが、ここでは人称接辞もついておらず、さりとて助動詞として使っているとしても妙な位置である。その上、白沢氏が他に kimatekka をこのような形で使った例も見当たらない。言い誤りかもしれないし、解釈の困難な例である。

² nupuri はそびえたった物体としての山を指す。したがって、ここでは「峰」とも訳している。同じく「山」と訳される kim と nupuri の意味の違いについては、バージョン2のほうがわかりやすいので、註21を参照のこと。

³ nupuri ousi : 言うまでもなく、すでに山 (kim) 奥にいたのであるが、そこにそそりたっている峰のふもとにということである。

pirka cise an ruwe ne hine
 karanke arpa=an w_a inkar=an akusu
 sirokane pon_ seta konkane pon_ seta
 poronno cise soy ta arukoterke kor oka
 ruwe ene an h_i ne wa <wa>
 mina=an kane
 pon_ seta a=omap pe ne kusu
 mina=an kane wa
 a=nukar wa an=an akusu <su>
 siran ayne cise onnay wa
 kamuy ne kusu kamuy koraci an menoko
 soyne ruwe ene an h_i ne hine <ne>
 i=nukar akusu
 "hunak wa ek kur⁴
 tane sironuman ruwe ne p
 ahun w_a <ma> rewsu hike⁵."
 sekor hawean kor ahun w_a kusu <su>
 neno a=ye hi ta
 somo ... ahun=an moyre yakun wen
 sekor yaynu=an kusu
 seturu kasike a=yayrarire⁶ hine
 ahun=an ruwe ene an h_i ne wa <wa>
 inkar=an hike
 cise or_ ta ne yakka
 poro cise, cise onnay ta
 sirokane pon_ seta konkane pon_ seta
 poronno oka wa, so okari arukoterke.

立派な家があり
 そのそばへ行ってみると
 銀の小犬、金の小犬が
 たくさん家の外でじゃれあっている
 ので
 私は笑いながら
 小犬がかわいいので
 笑いながら
 見ていると
 そのうちに家の中から
 いかにもカムイであるという様子の女性が
 出てきて
 私を見ると
 「どこから来た人でも
 もう日が暮れましたので
 入って泊っていらっしやい」
 と言いながら家の中に入ったので
 そう言われた時には
 入るのをぐずぐずしては良くない
 と思ったので
 その後すぐに続いて
 家に入って
 見ると
 家の中にも
 大きな家の中に
 銀の子犬、金の小犬が
 たくさんいて、炉のまわりでじゃれあっている。

⁴ hunak wa ek kur : 「どこから来た人」というのは、もちろん「素性は問わず」ということを意味している。

⁵ rewsu hike : この後に makanak 「どのように」が省略されている。「泊まっていったらいかがですか」の意。

⁶ seturu kasike a=yayrarire : seturu 「彼女の背中」 kasike 「の上を」 a=yayrarire 「私は自分に押し付けさせる」ということで、ぴったりと後ろにくっついていくことを表す。

ukesampa wa ukarkarsere
 arukoterke kor oka usi ta
 ahun=an ruwe ene an h_i ne akusu
 kamuy menoko kamuy ne kusu <su>
 kamuy aep patek saokuta wa
 pirka aep patek supa hine
 "tane sir'onuman
 sirkunne kane siran pe ne kusu <su>
 hokure ipe.
 nispa kamuy hokure ipe yak pirka."
 sekor hawean kor
 ita cikisma isam kane⁷
 i=koypuni ruwe ene an h_i ne wa
 newaanpe a=e wa inu=an h_ike
 nepenepo keraan w_a
 humas y_a ka a=eramuskari.
 pirka aep patek keraan aep patek
 kamuy ne kusu <su>
 kamuy aep patek a=i=kopuni wa
 a=e wa keraan wa
 a=e ruwe ene an h_i ne hine
 oro ta rewsu=an akusu
 isimne hopuni hine
 suy suke a suke a hine
 orowa i=koypuni kor
 pon_ seta utar ka ipere
 opitta ki ruwe ene an h_i ne hine
 orowa "inan pon_ seta e=kor_ rusuy?"
 sekor kane i=kowepekennu wa kusu <su>

追いかけて、転げまわって
 じゃれあっているところに
 入って行った。すると
 女神はカムイであるので
 カムイの食べ物ばかりをどっさり出して
 おいしい食べ物ばかりを料理して
 「もう日が暮れました。
 暗くなったようですので
 さあ、お食事をどうぞ。
 長者様、さあお食事をなさってください」
 と言いながら
 木皿に山盛りになるほど
 私によそってくれた。
 それを食べてみると
 なんとおいしいことか
 たとえようもない。
 上等なご馳走ばかり、おいしい食べ物ばかり
 カムイであるから
 カムイの料理ばかりよそってくれて
 それを食べるとおいしくて
 私は食べて
 そこで一晩を過ごす
 翌日、(女神は) 起きて
 またたくさん料理を作って
 私によそってくれ
 小犬たちも食事をさせた。
 全部の小犬にそうしてやって
 それから「どの小犬がほしいですか？」
 と、私にたずねたので

⁷ ita cikisma isam kane : ita は日本語の「板」から来た語と思われるが、食器として用いられる盆状の木皿を指す。cikisma は ci-「自ら」kisma 「～をつかむ」という構造の自動詞なので、ita cikisma isam kane は「盆がつかまることがないほど」のような意味になり、「木皿に山盛りに」と訳した。*ita cikisma hi のように「ところ」を表す hi のような形式名詞がないことに注意。

"konkane pon seta ne hike a=kor_rusuy."	「金の小犬のほうがほしいです」
sekor itak=an akusu	と言うと
"hetak e=tura wa e=san kusu ne na.	「さあ、それを連れて山を下りなさい。
pon_seta e=tura wa e=san kusu ne	小犬を連れて下りる
hawe ne yakun	というのであれば
sito a=kar a p ne ⁸	お団子があります。
poronno sitokar=an yakne	お団子をたくさん作ったら、
a=e=sere kusu ne na.	持たせてあげます。
samamni niwkes kor	倒木に難儀したなら
samamni niwkes h_i ta	倒木に難儀したときには
sito arkeetup ⁹ pon_seta e=ere wa ora	お団子を一つ半小犬に食べさせて
eani anak sito arke takup e=e kusu ne na.	あなたはお団子を半分だけ食べなさい。
yakne e=tura wa e=san w_a ne yakne	そうやって連れて下りたなら
pirka ...	よく ...
pirka a=e=kasnukar ki nankor_ na."	あなたはよい加護が得られるでしょう」
sekor kane hawean kor	と言いながら
sito suwe hine	団子をゆでて
orowa sito poronno i=sere hine	そして団子をたくさん私に背負わせて、
orowa sirokane pon_seta	それから銀の小犬を
sinep a=i=kore hine	私は一匹もらって
a=tura hine san=an ruwe	連れて山を下りた。
ene an h_i ne akusu	すると
samamni oka kor	木が倒れていると
samamni niwkes wa <wa>	(小犬は) 倒木に難儀して
samamni kes un samamni pa un	倒木の根っこのほうに、梢のほうに
cis cis kor kama rusuy kusu	泣きながら、乗り越えたいので
ekopaskopas ¹⁰ kor hoyupu hikeka	木によじのぼろうとしながら走るけれど

⁸ sito a=kar a p ne : 「お団子があります」と訳したが、その次に poronno sitokar=an yakne 「たくさんお団子を作ったら」と言っているし、その後には団子をゆでる場面も出てくるので、この段階では米の粉をこねてまるめた状態にしてあるという意味だと、一応解釈しておく。

⁹ arkeetup : arke 「半分」 e- 「〜で」 tu 「ふたつの」 p 「もの」 = 「一つ半」という、アイヌ語独特の、かつ、よく使われる表現である。

¹⁰ ekopaskopas : ekopas は「もたれかかる、よりかかる」という意味の語だが、この場合は乗り越えようとしているのだから、とびつくような姿勢で前足を掛けた状態になることを指していると思わ

kama ka niwkes.
 kama ka eaykap w_a kusu <su>
 sito a=sanke hine
 sito arkeetup a=ere hine
 orowa sito arke a=e hine
 okake an akusu
 samamni ka kama terke tek hine
 orowa a=tura wa san=an.
 samamni oka kor
 oro ta samamni niwkes wa
 samamni kes un samamni pa un
 ekopaskopas kor_
 cis kor hoyupu p ne kusu
 sito a=sanke wa a=ere kor
 sito arke a=e wa ... kor
 samamni kama terke tek.
 kosne terke tumasnu terke
 ki p ne kusu <su>
 asinuma ka samamni a=kama wa
 a=tura hine san=an san=an san=an.
 samamni okay pe ne kusu
 samamni niwkes kor
 sito arkeetup a=sanke wa a=ere.
 sito arke a=e kor
 ene a=i=ye hi neno¹¹
 a=tura wa san=an hine <ne>
 san=an ayne a=uni ta sirepa=an
 ruwe ene an h_i ne wa
 ora a=uni ta sap=an kor
 usa pirka ... cep ne yakka pirka hike

越えることができない。
 乗り越えられないので
 団子を取り出して
 団子を一つ半食べさせ
 それから自分で団子を半分食べた。
 食べ終わると
 (小犬は) 倒木をぼんと飛び越えた。
 それからまた連れて下りた。
 倒木があると
 そこで倒木に難儀して
 倒木の根っこのほう、梢のほうに
 よじのぼろうとしては
 泣きながら走るので
 団子を出して食べさせ
 自分では団子を半分食べると
 倒木をぼんと飛び越して
 軽く跳ね、元気に跳ね
 るので
 私も倒木を越えて
 犬を連れてどンドン下りて行った。
 倒木があるので
 倒木に難儀したら
 団子を一つ半出して食べさせ
 自分は団子を半分食べながら
 言われたとおりにして
 連れて下りてきて
 山を下りて、家に着いた。
 そして
 家に一緒に下りてくると
 いろんなおいしいもの... 魚もおいしいものを

れる。

¹¹ ene a=i=ye hi neno : ene 「そのように」 a= 「人が」 i= 「私に」 ye 「言った」 hi 「こと」 neno 「同様」

kam ne yakka pirka hike	肉もいいものを
a=satsatu wa poronno a=kor pe ne kusu	私はたくさん干してとってあるので
newaokaype a=supa wa	それを料理して
rur_ turano a=kopuni kor	お汁と一緒に上げると
e a e a ruwe ene an h_i ne hine	ぱくぱく食べて
rewsi oka=an ruwe ene an h_i ne akusu	ひと晩が過ぎると
isimne kuneywa hopuni=an w_a	翌朝私は起きて
suy suke=an kor an=an.	また食事の支度をした。
pirka aep patek a=supa kor an=an akusu	おいしいご馳走ばかり作っていると
rapokiketa ape okari mik kor	その間に、(小犬が) 炉のまわりを吠えながら
hoypu hawe ene an h_i.	走る声がこう聞こえた。
"sirokane でない konkane karkar wo o o ¹² .	「コンカネ カラカラ ウォ、オ、オ。
konkane karkar wo o o.	コンカネ カラカラ ウォ、オ、オ。
konkane karkar wo o o."	コンカネ カラカラ ウォ、オ、オ。」
sekor hawean kor ape okari hoypu ...	と言いながら、炉のまわりを走った。
hoypu akusu paroho wa ¹³ konkane	走るとその口から金が
poronno so okari tuy ¹⁴ pe ne kusu <su>	たくさん、炉のまわりにこぼれ落ちるので
kane umomare a=emonasap kane	金を拾い集めるのに忙しいほど
kane tuy pe ne kusu <su>	金がこぼれ落ちるので
sino nispa ne an=an ruwe ene an h_i ne	私はたいそうな長者になり、
kane poronno <no>	金をたくさん
pon_ seta tuyre wa i=kore p ne kusu	小犬が落としてくれるので
sino nispa a=ne wa an=an	私は大長者になって、暮らしていた。
ruwe ene an h_i ne akusu	すると

¹² konkane karkar wo o o : この部分は独特の節をつけて語っている。『民譚集』では sirokani wol wol などと鳴くことになっている。こうした個々の物語に固有の要素として伝承されると思われる表現を、筆者はキーフレーズと呼ぶことにしている。cf. 中川裕 (2001) 「口承文芸のメカニズム-アイヌの神謡を素材に-」藤井貞和他編『創発的言語態』東京大学出版会 : 68

¹³ paroho wa : paroho or wa とならないことに注意。一般に所属形の後では、位置名詞を介さずに場所格助詞 (ta, wa, un, peka) がつくのが普通である。

¹⁴ tuy : tuy には「切れる」という意味もあるが、niham 「木の葉」や otop 「髪の毛」などが落ちる時にも用いる。すなわち何かにくっついてぶらさがっているものが、「切れて」落ちることを指す。ここでも小犬の口の中にあった金が、口から離れて落ちるということで、tuy を使っているのであろう。ちなみに、「雨が止む」ときも apto tuy という言い方をするが、これも雨を空からぶらさがっているものとしてとらえた表現であろう。

sineanpeta a=kotanu panake un
 Pananpe ek hine <ne>
 ek hine ene hawean h_i ene an h_i.
 "a=kor Penanpe makanak iki wa
 ene nispa ne ruwe ene an h_i ne ya?"
 sekor kane hawean w_a kusu
 "ek! ipe kor a=epaskuma."
 sekor itak=an akusu
 "hoksi tasi ci=nu rok pe."¹⁵
 sekor hawean kor
 apa sam un okuyma¹⁶ tek
 kor hoyupu wa oar isam
 ruwe ene an h_i ne akusu <su>
 ekimne arpa ayne toop kim ta arpa akusu
 kane cise poro cise an ruwe ne hine
 oro wa pon_ seta poronno soyenpa wa
 ukoterke wa sinot kor oka usi ta
 arpa ruwe ene an h_i ne hine
 kamuy menoko or wa a=nukar wa
 "ahup w_a rewsu yan.
 tane sironuman ruwe ne na."
 sekor kane a=ye p ne kusu
 ahun w_a rewsu wa ora isimne <ne>
 "inan pon_ seta e=kor_ rusuy?"
 sekor kane kamuy menoko or wa
 a=kowepekennu akusu <su>
 "sirokane pon_ seta a=kor_ rusuy."
 sekor kane hawean hine <ne>

ある日のこと、わが村の川下に住む
 パナンペがやってきて
 やってきてこう言った。
 「わがペナンペよ、いったいどうやって
 こんな長者になったのだい？」
 というので
 「来いよ！ 食事をしながら教えてやろう」
 と言うと
 「先に俺が聞いていたのに」
 と言いながら
 戸口に小便をひっかけて
 走って行ってしまった。
 すると、
 (パナンペが) 山奥へどんどん行くと
 立派な家、大きな家が建っていて
 そこから小犬がたくさん外に出てきて
 じゃれあって遊んでいるところに
 たどりつくと
 女神に見つけられて
 「入って泊って行きなさい。
 もう日が暮れましたよ」
 と言われたので
 入って一泊して、翌日
 「どの小犬がほしいですか？」
 と、女神から
 尋ねられたので
 「銀の小犬がほしいです」
 と言った。

¹⁵ hoksi tasi ci=nu rok pe : このへんの展開は、パナンペ譚に共通かつ固有のものである。この部分にだけ ci= という人称が用いられている理由は不明だが、少なくとも、これもまたキープレーズとして、このままで固定した表現として伝承されてきたことを示している。

¹⁶ okuyma : ここではこの語を使っているが、バージョン2では kucir という動詞を使っている。kucir と表現することが、バージョン2で「なんか犬みたいだ」という評価を与えている原因になっているので、本来は kucir のほうを使うはずのところであったと思われる。註 26 参照。

orowa kamuy menoko	すると女神は
sito poronno suwe a suwe a hine	団子をたくさんゆでてゆでて
sito poronno a=sere hawe ene an h_i <ni>.	団子をたくさん背負わせて、こう言った。
"samamni niwkes ciki	「倒木に難儀したら
sito arkeetup ere wa	お団子を一つ半食べさせて
sito arke e=e kor	お団子を半分自分で食べて
e=tura wa e=san w_a ne yakne <ne>	連れて山を下りたなら
poro nispa ne e=an etokus ruwe ne na."	大長者になるはずですよ」
sekor a=ye hine	と言われて
sito poronno a=sere hine, pon_ seta ...	団子をたくさん背負わされて、小犬 ...
sirokane pon_ seta kor_ rusuy pe ne kusu	銀の小犬を欲しがったものだから
sirokane pon_ seta a=kore hine	銀の小犬をもらって
tura wa san.	連れて下りた。
samamni niwkes kor <kor>	倒木に難儀すると
oro ta yaykata sito arkeetup e.	自分で団子を一つ半食べて
ororwa pon_ seta sito arke takup ere wa	小犬には団子を半分だけ食べさせて
orowa samamni niwkes kor kikkik wa	倒木を越えられないと、ぼかぼか叩いて
paraparakka a paraparakka a kor	泣きわめかせながら
tura wa san yak a=ye hi ¹⁷	連れて山を下りて来たということをも
a=nu kor an=an ruwe ene an h_i ne.	私は耳にしていた。
cise or_ ta tura wa san yakka <ka>	家まで連れて下りてきたが
hawke aep ¹⁸ wen aep patek	粗末な食べ物、まずい食べ物ばかり
supa wa ere p ne kusu,	料理して食べさせたので
isimne wano so okari	翌日から炉のまわりに
osoma a osoma a kor	うんちをぼたぼたたらして
pon_ seta hoyupu p ne kusu	小犬が走り回ったので
koruska wa toykokikkik wa	それに腹を立てて、ひどくぶん殴り

¹⁷ yak a=ye hi a=nu : 「ということを私は聞く」という表現で、今まで3人称で進めてきた物語を、ここでペナンペの叙述に引き戻している。

¹⁸ hawke aep : hawke は「弱い、安い」など、程度の低いことを表す。hawke aep とは、白沢氏の説明によれば「食べても、ああうまいと思わない」もののことだという。ただし、hawke の反対語は一般に yupke だが、hawke aep の反対語は keraan (aep) または pirka aep だということで、yupke aep とは言わないようである。

paraparakka p ne kusu,
 poronno osoma a osoma a p ne kusu
 konto <to> si nuwe a si nuwe a wa
 si tum eus wa ene iki hi ka isam.
 si tum oma wa an
 yak a=ye hi a=nu ruwe ne.
 korka asinuma anakne
 a=kor pon_ seta a=omap pe ne kusu
 uturu ta a=kisma wa
 a=cokcoksekar ka ki kor
 a=kor_ ruwe ene an h_i ne h_ike
 ramma koraci so okari
 "konkane wo o o konkane ...
 konkane konkane."
 sekor hawean kor mik kor
 paroho wa konkane tuy kor
 sino a=epirka kor an nispa a=ne
 ruwe ene an h_i ne kusu
 a=eysoytak hawe ne.
 neno kamuy menoko itak h_i neno
 asinuma anak iki=an w_a nispa ne an
 nispa a=ne ruwe ne.
 kamuy menoko i=ye itak oterke¹⁹ p anakne
 si tum eus ayne <ne>
 si hura ekot wa isam yak a=ye hi
 a=nu ruwe ene an h_i ne kusu
 iteki kamuy itak iteki a=oterke p ne na
 sekor kamuy menoko でない
 Penanpe itak ruwe ne wa. おわり。

泣きわめかせたので
 たくさんうんちをたらしたので
 そのうんちを掃き続けたが
 うんちに頭を突っ込んで、どうにもならなくなり
 どうとうんちに埋まってしまった。
 という話を聞いた。
 けれども私は
 私の小犬をかわいがったので
 時には抱きしめて
 口づけをしたりもして
 飼っていたところ
 いつもいつも炉のまわりで
 「コンカネ ウォ、オ、オ。コンカネ ...
 コンカネ コンカネ」
 と吠えると
 口から金がこぼれ落ちて
 それでたいそうな長者になった。
 それなので
 この話をするのだ。
 女神さまが言ったとおりに
 私はして、長者になった。
 私は長者になったのだ。
 女神が言った言葉をないがしろにしたものは
 うんちの中に頭を突っ込んだあげく
 うんちの匂いで死んでしまったということを
 私は聞いたので
 カムイの言ったことをないがしろにするなよ
 と、女神ではなくて
 ペナンベが語ったのだ。おわり。

¹⁹ oterke : 「踏む」が原義だが、日本語の「踏みにじる」と同じような比喩的な意味も表わす。

Penanpe ... Penanpe Pananpe ...	ペナンペ ... ペナンペ、パナンペ ...
Penanpe Pananpe an w_a a=ne wa oka=an ruwe ene an h_i ne awa <wa> sineanpeta	ペナンペとパナンペがいて、私たちであって 私たちは暮らしていたが ある日
Penanpe a=ne wa sineanpeta ekimne arpa=an rusuy wa kusu orowano <no> ekimne arpa=an a arpa=an a ayne <ne> toop kim ta arpa=an ruwe ene an h_i ne akusu tane anakne nupuri kurka cup rari ²⁰ kane siran kor nupuri poronno an usi ²¹ ta arpa=an ruwe ene an h_i ne akusu nupuri sam ta somo ka oro ta cise an kunak a=ramu a hi cise an ruwe ne hine oro ta <ta> cise onnay wa sirokane pon seta konkane pon seta ²² hoyuppa wa soyenpa hine <ne> soy ta arukoterke cise okari arukoterke <ke> wa a=enusikari.	私はペナンペであり、ある日 山に行きたくなったので 山に向かってどんどん どんどん行くうちに 山奥までやって くると もはや山の端に 日が沈みかかっている 峰々の連なるところへやって くると 峰の近くに、まさか 家があるとは思っていなかったが 家が建っていて そこに、家の中から 銀の小犬、金の子犬が 走り出て来て 表でじゃれあっている。 家のまわりでじゃれあっているので 私は目を丸くした。

²⁰ nupuri kurka cup rari : 常套句であり、「山の上に太陽が押しつけられたようになっている」と解したいところだが、単語構成としては nupuri 「山」 kurka 「～の上」 cup 「太陽」 rari 「～を押しつける」ということであるから、「太陽が山の上を押さえつける」というのが原義であろう。

²¹ nupuri poronno an usi : kim の奥のほうに行くと、nupuri がたくさんあるという、この表現から、同じ「山」と訳される kim と nupuri の違いがはっきりわかる。nupuri というのはそびえたつ「物体」なのであり、「場所」あるいは「方向」としての kim とは明確に区別されるべきものである。それを示すために、ここでは nupuri を「峰」と訳した。

²² sirokane pon seta konkane pon seta : 解説で sirokane と konkane の格の逆転について述べたが、sirokani が先で、konkani が後という表現上の順番は、この話の場合でも守られている。

somo ka oro ta cise an kunak a=ramu
 po_n seta ka oka kunak a=ramu
 ruwe ka isam ar kim ta ne a p
 ene cise an w_a oro wa
 oro wa pon seta hoyuppa wa soyenpa wa
 cise okari ukoterke.
 cise soy ta ukoterke <ke>
 siri a=emina kane
 pon seta ukoterke siri a=emina kane
 ratcitara arpa=an ayne
 karanke arpa=an akusu
 oro ta sine menoko cise or wa soyne.
 kamuy ne kusu kamuy koraci an menoko
 soyne hine i=nukar ruwe ne hine orowa
 i=tukarike sikeranaatte wa an ayne
 i=kohetari hine itak hawe ene an h_i <ni>.
 "tane sironuman w_a sirkunne wa
 hunak un omanan kur ek ruwe ne yakka
 ahun w_a rewsu wa
 orowa arpa yak pirka na."
 sekor hawean kor ahun ruwe ne hine <ne>
 wa kusu seturu kasike a=yayrarire hine
 ahun=an w_a inkar=an akusu
 cise or_ ta ka poronno pon seta an w_a
 apeoy okari
 sorekusu apeoy okari
 ukoterke kor hoyuppa.
 nepenepo poronno an pe ne ruwe ne ya ka
 a=eramuskari. poronno pon_ seta
 sirokane pon seta konkane pon seta
 ukoterke wa, osoyne wa ...
 soy ta ukoterke kor okay pe ka

そんなところに家があるとは
 小犬がいろいろとは思いま
 しないような山奥に
 このように家があって、そこから
 そこから小犬が走り出て来て
 家のまわりでじゃれあい
 家の外でじゃれあう
 その姿を笑いながら
 小犬がじゃれあう姿を見て笑いながら
 ゆっくりと歩いて行って
 近くまで行くと
 そこにひとりの女性が家の中から出てきた。
 見るからにカムイらしい姿の女性が
 外に出てきて、私を見ると
 私の前でしばらく顔を伏せて
 顔を上げると、こう言った。
 「もう日が暮れて暗くなるので
 どこへ行くつもりでおいでになった方でも
 家に入ってひと晩泊って
 それからお行きなさい」
 と言うと家の中に入っていった。
 そこで、その後になすすぐ続いて
 中に入って行って、見ると
 家の中にもたくさんの小犬がいて
 炉のまわりで
 炉のまわりで
 じゃれあって走り回っている。
 なんとまあ、たくさんいることか
 わからないほどのたくさんの犬
 銀の小犬、金の小犬が
 じゃれあって、表から ...
 外でじゃれあっていたものたちも

tane sirkunne p ne kusu	もう暗くなってきたので
topaha ahun hine	群れをなして入って来て
ape okari ukoterke rok ukoterke rok	炉のまわりで取っ組みあって
kor oka rapoki	いる、その間に
menoko suke hine	女の人は食事の支度をして
pirka suke keraan suke ki hine	立派な料理、美味しい料理を作ってくれて
a=i=koypuni.	私によそってくれた。
ita cikisma isam kane	お盆を持つところがないくらい
a=i=koypuni ruwe ene an h_i ne hine <ne>	たくさんよそってくれて
a=koonkami wa a=e ruwe ene an h_i ne.	私は礼拝をして、それを食べた。
nepenepo keraan pe patek	なんとまあおいしいものばかり
keraan aep patek supa wa	おいしい料理ばかり作ってくれ
orowa ene ita cikisma isam kane	それを山盛りにして
a=i=kopuni ruwe ene an h_i ne wa	私に差し出してくれた。
a=e a a=e a ruwe ene an h_i ne.	それを私は夢中で食べた。
sinen ne an=an pe ne kusu <su>	私はひとりものなものだから
suke=an w_a ipe=an y_akka	料理して食事をするとっても
tunassuke=an ²³ w_a tunas a=e p ne kusu	さっと作って、ぱっと食べるだけなので
keraan humi ka a=erampewtek no	おいしいもまずいもわからず
a=e p ne a p	食べていたのだが
katkemat ene suke wa i=kopuni wa	このように女性が作ってよそってくれたものは
keraan humi a=omonnure kor a=e wa	何とおいしいことよと感心しながら食べ
rewsi=an ruwe ene an h_i ne akusu	その晩ひと晩泊ると
isimne tunas hopuni. menoko ki hine	女の人は翌朝早くから起きだし
suy tunassuke ²⁴ ruwe ene an h_i ne hine	また、さっと料理を作って
orowa a=i=ipere.	私によそってくれた。
kuneywa ipe okake an akusu	朝食が終わると
orowa ene hawean h_i ene an h_i <ni>	こう言った。

²³ tunassuke : バージョン1にはなかった表現。男性の一人暮らしだと、とにかく手間をかけずに、腹さえ満たせばよいというような食事になるということを、tunas「早く」suke「料理する」という簡潔な言葉で表した面白い表現。

²⁴ tunassuke : この tunassuke は、前出のものとは違って、朝食なので手早くさっと作ったという意味であろう。

"sirokane pon seta he e=kor_rusuy?	「銀の小犬がほしいですか？」
konkane pon seta he e=kor_rusuy?	金の小犬がほしいですか？」
ine e=kor_rusuy pon seta	どっちの小犬がほしいか
e=ye wa ne yakne	言ったら
e=tura wa e=san y_ak pirka na."	連れて行って山をおりるのですよ」
sekor hawean ruwe ne hine <ne>	と言うので
yaykowepeker=an w_a inu=an akusu	考えてみて
"sirokane pon seta akkari	銀の小犬より
konkane pon seta a=i=kore p ne yakun	金の小犬をくれるのなら
a=ahupkar ²⁵ wa san=an yak pirka."	もらって下りよう」
sekor yaynu=an kusu	と思ったので。
"konkane pon seta	「金の小犬が
a=kor_rusuy ruwe ne na. "	ほしいです」
sekor kane itak=an akusu <su>	と言うと
"hawe ne yakne	「それならば
e=tura wa e=san y_ak pirka na.	連れて山をおりなさい。
ponno i=tere.	ちょっと待って。
sito poronno a=kar a p ne <ne>	お団子をたくさん作ってあるから
e=tura pon_ seta sito arkeetup e=ere.	連れていく小犬に団子を一つ半食べさせなさい。
apkas niwkes h_i ta sito arkeetup e=ere.	歩けない時にはお団子を一つ半食べさせなさい。
sito arkehe e=e kor	そして、あなたが半分食べて
e=tura wa e=san w_a ne yakne	連れて山を下りたならば
e=epirka etokus ruwe ne na."	きっと裕福になれるでしょう」
sekor kane hawean kor	と言いながら
orowano sito suwe yaymonpokusmak hine	急いで団子をゆでて
poronno sito suwe hine a=i=sere kuni p	団子をたくさんゆでて、私が背負えるように
kar_ ruwe ene an h_i ne hine	してくれて
sito a=se ruwe ne.	私はその団子を背負った。

²⁵ a=ahupkar : 「～をもらう」を意味する動詞として ahupkar と unkeray があるが、本田優子氏によると、こちらから欲しがってもらうのが ahupkar、向こうから与えられるのが unkeray だということである。『萱野辞典』によると、「貰い子」は ahupkarpo であり、「乞食」は iahupkarpe ということになっており、この ahupkar の意味をよく表している。もっとも『方言辞典』によると、美幌では「貰い子」を unkeraypo ということになっているので、地域差があるかもしれない。

orowa pon_ seta sinep
 konkane pon_ seta sinep a=i=turare hine
 a=tura wa san=an ruwe ene an h_i ne <e>
 kor sap=an ayne <ne>
 horak samamni oka kor
 samamni kama niwkes
 samamni niwkes wa
 samamni kes un hoyupu
 samamni pa un hoyupu.
 cis cis kor ki ruwe ene an h_i ne kor,
 “tane sinki wa ne nankor.”
 sekor yaynu=an kusu <su>
 a=se sito a=sanke hine
 sito arkeetup a=ere
 orowa sito arke a=e ruwe
 ene an h_i ne akusu <su>

(電話により中断)

samamni niwkes, pon_ seta ki kor
 sito arkeetup a=ere
 sito arke a=e kor a=tura wa san=an akusu
 いや、 sito arkeetup a=ere kor
 samamni kama terke tek wa
 i=tura wa san ruwe ene an h_i ne hine <ne>
 本当に samamni niwkes kor sito arke
 sinki sekor yaynu=an pe ne kusu
 sito arkeetup a=ere kor
 ene a=i=ye hi ne kusu
 neno iki=an kor a=tura wa san=an wa
 a=uni ta san=an w_a orano <no>
 pirka suke=an w_a

それから小犬を一匹
 金の小犬を一匹、お供にして
 連れて山を下りて
 ふたりして下りていくと
 倒れた木があつて
 小犬は倒木を乗り越えられず
 倒木に難儀して
 根っこのほうに走ったり
 梢のほうに走ったり
 泣きながらそうしている時には
 「もう疲れたのだろう」
 と思ったので
 背負っている団子を下して
 団子を一つ半食べさせ
 自分では団子を半分食べ
 ると

小犬が倒木を乗り越えられないので
 団子を一つ半食べさせ
 自分で半分食べながら連れておけると
 団子を一つ半食べさせると
 小犬は倒木をぼんと飛び越え
 私について下りてくる。
 倒木を乗り越えられない時、団子を半分
 疲れたのだと思うので
 団子を一つ半食べさせながら
 そのように言われたので
 そのようにしながら連れて下りて
 自分の家まで下りてくると
 御馳走を作つて

pirka a=ipere ki kor
 rewsika=an akusu <su>
 isimne kuneywa wano ape okari
 mik kor hoyupu hawe ene an h_i <ni>
 "konkane kar kar wo o o.
 konkane kar kar wo o o."
 sekor mik kor ape okari hoyupu akusu
 paroho wa konkane tuy wa
 poronno konkane tuy pe ne kusu
 orowano konkaneuomare=an.
 newaanpe a=epirka kor an=an akusu
 a=kotanu panake un Pananpe
 sineanta ek hine <ne>
 "a=kotanu penake un Penanpe
 makanak iki wa nispa ne hawe an?"
 sekor kane hawean w_a kusu
 "ek! ipe kor a=epaskuma ro."
 sekor itak=an akusu
 "hoski tasi ci=nu rok pe!"
 sekor hawean kor apa pa un
 kucir²⁶_tek wa hoyupu wa isam.

何か seta みたいな話でしょ？
 apa pa un kucir_tek ってゆったら。
 いやーと思うんだけども、
 そういうふうに聞いたものはそういわんば。

たっぷり食べさせて
 ひと晩過ごす
 翌日、小犬は朝から炉のまわりを
 このように吠えながら走り回った。
 「コンカニカラカラ ウォ、オ、オ
 コンカニカラカラ ウォ、オ、オ」
 と、吠えながら炉のまわりを走ると
 口から金がこぼれおちた。
 たくさんの金がこぼれおちるので
 私は金を拾い集めた。
 それで私が裕福になって暮らしていると
 村の川下に住むパナンペが
 ある日やってきて
 「村の川上にすむペナンペよ
 どうやって長者になったの？」
 というので
 「来いよ！ 食事をしながら教えてやろう」
 と言うと
 「俺が先に聞いていたのに！」
 と言いながら、戸口に向かって
 小便をひっかけて走って行ってしまった。

何か犬みたいな話でしょ？
 戸口に小便をひっかけたって言ったら。

²⁶ kucir : バージョン1では okuyma と言っているが、「犬みたいだ」というのは、戸口に小便をするということだけでなく、この kucir という動詞にも関係している。普通、人間が小便をするのは okuyma であり、kucir とは言わない。これは、動物が排尿するときだけに使う動詞である。なお、サハリンにクズリというイタチ科の動物がおり、アイヌ語で kuciri という。知里真志保は『動物篇』でクズリについて、「この動物は木の上において、下を通る人に小便をかけるという。その小便が目に入ると目がつぶれるとってアイヌは恐れている。kuciri とは小便の意だ」と述べている。クズリの語源はニヴフ語だと書いてある辞典もあるが、アイヌ語起源である可能性もある。

kucir_ tek kor	小便をひっかけて
hoyupu ruwe ene an h_i ne wa	走り去ってしまった。
inu=an wa an=an akusu <su>	聞くところによると
seta or peka cikap or peka ²⁷ ne korka	犬のうわさに、鳥のうわさにはあるが
inu=an hawe ene an h_i <ni>	聞いたところでは
Pananpe toop toop kim ta arpa akusu <su>	パナンペはずっとずっと山奥に行って
pon_ seta poronno an usi ta arpa hine	小犬がたくさんいるところに着いて
orowa pon_ seta sinep a=kore hine	小犬を一匹もらうと
sito poronno a=sere hine	団子をいっぱい背負わされて
pon_ seta tura wa san kor	小犬を連れて山を下りてきた。
pon_ seta sinki wa samamni niwkes kor	小犬がつかれて倒木を越えられないと
toykokikkik wa paraparacka <ka>	ひどく叩いて、泣きわめかせた。
osoma pakno ka kikkik wa paraparacka	うんちをもらすほど叩いて泣かせて
orowa sito arke takup ere wa	団子を半分しか食べさせず
orowa sito arkeetup yaykata e wa	団子一つ半は自分で食べて
paraparacka kor ninpa wa san sekor	泣かせながらひきずって下りてきたと
seta or peka cikap or peka inu=an kor	犬のうわさに、鳥のうわさに聞いて
an=an ruwe ene an h_i ne.	いた。
tura wa san w_a orowa ka	連れて下りてくると
cise or_ ta ka nep ka pirka suke ki wa	家では何の御馳走も作って
ere ka somo ki no	食べさせもせず
kikkik a kikkik a kor an akusu	ほかほか殴り続けていると
isimne wano ape okari	次の日になって炉のまわりに
osoma a osoma a osoma a wa	犬はうんちをぼとぼと落とし続けて
newaan osoma nuwe.	(パナンペは) そのうんちを外に掃き出した。
tumu eus kor an tumu eus wa	うんちの中に頭を突っ込んで
po ruska wa toykokikkik kor an	なおさら腹を立てて犬を手ひどく殴っている。
yak a=ye hi a=nu kor an=an ruwe ne	という話を耳にしながらいた。
korka asinuma anakne	けれど、私は
ene a=i=ye hi neno <no>	言われたとおり

²⁷ seta or peka cikap or peka : 逐語訳すれば、「犬のところを(通って)、鳥のところを(通って)」ということで、犬や鳥が鳴き声で人間に噂話を聞かせるという発想に立った表現だと思われる。

”pirkano a=ipere yak a=epirka sekor
 kamuy menoko yaynu wa
 sito i=sere hawe ne nankor."
 sekor yaynu=an pe ne kusu <su>
 sito arke takup a=e kor
 sito arkeetup e kor
 samamni ka wa ...
 samamni kama kosne terke ki wa
 a=tura wa san=an pe ne a p
 ene hawas h_i an sekor yaynu=an korka
 kaneuomare=an_siri a=emonasap kane
 kaneuomare=an pe ne kusu <su>
 poronno kane a=uomare wa
 a=epirka kor an=an
 Penanpe a=ne ruwe ne kusu
 kane ... kaneuomare patek a=ki kor
 an=an ruwe ne korka
 monasap=an kane ne ...
 kaneuomare kor an
 Penanpe a=ne ruwe ne kusu
 a=eysoytak hawe ne na. って
 Penanpe isoytak.

きちんと食べさせれば、裕福になれると
 女神さまが考えて
 団子を私に背負わせたのであろう」
 と思ったので
 自分は団子を半分だけ食べて
 犬が団子一つ半食べると
 倒木の上から
 倒木を軽く飛び越えて
 一緒に下りてきたところ
 (女神の) 言うとおりになったと思っているが
 金を拾い集めて、手が足りないほど
 金が集まるので
 たくさんの金を集めて
 それで裕福に暮らしていた。
 私はそういうペナンペという男であるので
 金集めばかりをしながら
 暮らしていたのだが
 忙しくてしかたないほど
 金集めして暮らす
 私はペナンペであったので
 この話をしたのだと
 ペナンペが語った。

(なかがわ ひろし・千葉大学人文社会科学研究所)

Ainu Folklore Text-10
Nabe SHIRASAWA's Pananpe and Penanpe tale,
“Penanpe Got a Gold Puppy”

NAKAGAWA Hiroshi

Summary:

These texts were told by Nabe Shirasawa (1905-93, born in Chitose), on Feb. 18, 1991 and Nov. 27, 1992. They are the two versions of the same tale which belongs to the genre called “Pananpe and Penanpe tales”. It has been said that the genre is told in the 3rd person, which is an unusual style in the Ainu folktales. The texts in this book, however, were told in the 4th person style, which is the most usual style in the Ainu folktales. Probably these tales had been told originally in the 3rd person style, then shifted to the one the teller had been most accustomed.

Outline of text:

I am Penanpe. One day I wanted to go deep in the mountains. I went further and further and finally found a big house. Around it many silver and gold puppies were playing. Then a goddess came out of it and invited me inside to stay there. Next morning she asked me which puppy I wanted. I asked her a gold one and she told me to feed it one and a half rice dumpling on the way when the puppy was tired.

I went down the mountains with the puppy and when it got tired and couldn't jump over fallen trees, I fed it one and a half dumpling as the goddess had told me. I went back home and searved the puppy a delicious dish. From next day the puppy ran around the hearth barking “making making gold, wo o o!”, then many golds dropped down from its mouth. I gathered it everyday and was living well with it.

One day my downriver friend Pananpe came up and asked me, “How did you become so rich?” I tried to explain him but he didn't hear me and, even worse, he pissed at the door of my house then went away. He, too, went deep in the mountains and stayed at the goddess's house. Next day he was given a silver puppy but he treated it cruelly, hitting it severely and giving it only a half dumpling and eating one and a half himself. Even after back home he served only a poor meal to it. From next day the puppy dropped an amount of dung around the hearth so that Pananpe had to keep cleaning them. Finally he was buried in the dung and died. So I heard - Penanpe said.